
見るな

ミズキシホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見るな

【Z-ONE】

Z2639G

【作者名】

ミズキシホ

【あらすじ】

読むとキケンです。何があつても責任は負えません……。

怖い話やホラー映画が嫌いじゃないので、
ついつい読んでしまった「読むと危険な話」。

読んでしまうと、ナニカ危険なんだと。

わたしは、見えたりしないし、にぶにぶさんだから、ナーニーとも感じないけれど、

流石にチョット後悔した。

鈍い係でよかつた……。

【そういうの】の存在は完全否定はしてない。
ま、わたしには感じられないけれど、ないこともないのだろうねー、
と。

さて、「読むと危険な話」を読んだら思い出してしまった。
そういうえば昔、そういうのがあったなあ、って。

せっかく思い出したので、披露します。
こうして公開しておいてあれだけ、
これも、ひとつには「読むと危険」なので、
なんでもないひとだけ読んで下さい。

わたしは責任取れんばー。

釣りでもないし、オチもないから。

じゃあ、なぜアップするんだろ?。

わかんない。

ア子は小さい頃から、

いわゆる【そういうの】に敏感な子供だった。

他の人には「見えない」【モノ】が見えた、
他の人が「感じない」【気配】を感じていた。
A子にしてみれば、それは至って日常的なことで、
誰もがみな「フツー」にそうなのだと思つていた。

が、自分「だけ」が「フツーではない」とこいつことに気付き、思い知るまでにそう時間はからなかつた。

まだ幼稚園へ上がる前、

まるでそこに誰か相手がいるかのように遊んでいたり、誰もいない空間へ向かって笑いかけたり指をさしたり手を振ったりするのは、

【ルーツの】 にせんの感な両親や親戚をひどく気味悪がらせた。

つい今まで、スヤスヤと昼寝をしていたのがムクツと起き上がるなり、テーブルの下へ潜り込んだ瞬間、

夜中に火がついたように泣き出したかと思えば、一点を指差し目を見開いて大声で泣き叫んだり、

家中でだが、歩いていこうとするのを、飼い犬が、ラブラドールレトリバー

A子の服を咥えて必死に止めたり、A子に関する、両親たちにしてみれば不可解で不気味な行動は、数えだとキリがないのだった。

ただ、母方の祖母サキだけは別で、離れて暮らしているサキの家を訪れた時もやはり、誰もいないのに（両親たちにはそう見える）、A子がキヤツキヤと愉しそうにはしゃいでいるのを皆が気味悪がるのを見ると、

「あれは大丈夫。【悪いの】じゃないから」と言つたりした。

「ムツク（犬の名）がそばにいるから大丈夫だよ」とも。

サキは【そういうの】に対してはかなり敏感で、A子のそういう行動は、なるほどそういうわけかと、遺伝なのかと、両親や親戚たちはなんとなく納得せざるを得ないのだった。

離れて暮らしているとはいって、サキの家は、A子の家から歩いて3分ほどの近さだった。A子はおばあちゃん子で、母は専業主婦だったにも関わらず、A子は朝から晩までサキの家にいた。

幼稚園へ上がる気になるとサキはA子へ、「見えたり感じたりしても、むやみにひとに喋つてはいけないよ」と教えた。

△子もその頃にはもうすでに、自分が「フツーではない」と云ふ付いていたし、自分に「だけ」見えるものなのか、そうでないのかの違いが分かるようになっていた。

小学生になると、

さすがに、ほかのひとは見えない【何か】に笑いかけたり一緒に遊んだりはしなくなつたし、

努めて無視するようにしていたが、

見えたり感じたりすることは相変わらず頻繁にあった。

自分の部屋で机に向かつて勉強していると、

タタタツと何かが部屋へ入つてきて、机の横でジイイイイイツとし

ている。

パツと向き直ると、そこには何もない。

でも、またしばらくすると、タタタツと横に来てはジイイイイイツ

としている。

そちらを向かないように横田で観察すると、

顔はよく見えないが、ちょうど机の背丈くらいの「おじさん」のようだつた。

その「小さいおじさん」は、ただそこど、ただ、じいじつとしているのだった。

夜中、

なんだか騒がしい音に田が覚めると、

ベットのすぐ脇を、20センチくらいの高さの「阿波踊り」の一行が通り過ぎたこともあつた。

朝起きて、そういえばあれは夢だつたのか、と思つたが、アドアの前に、なぜかひとつだけ、阿波踊りの衣装のひとつである網笠が落ちていた。手のひらサイズの。

「阿波踊り」はそれつきりだつたが、

「小さいおじさん」はその後もしばしばやって来た。
ただいるだけで、何をするわけでもないし、
なんと言つても、【悪い感じ】がしなかつたので、「小さこねじさん」のしたいよひにわせておいた。

この【悪い感じ】がある・しないが分かるようになつたのは、
多分にサキによる影響が大きいだろう。

A子がまだまだ小さかつた頃、

【悪い感じ】はおひか、自分に「しか」見えない、といひことも分
からなかつた頃、

サキの家で遊んでいると、

やはり【何か】がやつてくる、といひか、気付いてしまひ。

A子にしてみれば遊び相手ができる嬉しいのだが、
「ダメダメ、それはダメだよ。A子、いひむけおいで」
とサキが言つことがある。

何度かそういうことがあるうち、

サキが「ダメ」だというモノには共通点があることが分かつてきた。
それは、そのモノのいる辺りだけ、暗い色をしていて、空氣が淀んで
いる感じがするのだった。

実際にはそんなことはあり得ないのだが、
そこだけ空氣が重い、といひか、濃度が高い。

さうして、そのモノの近くにいると、寒くもないのに全身に鳥肌がた
つ。

A子は、サキやムックに守られているおかげで、

【悪いモノ】に出会った事はまだないのだが、強烈だったのは、

小学校3年生の頃のある日の夕方。

その日、A子が学校から帰ると、母親はムックを連れて出かけた。

サキの家に行こうかと迷にながらぐだぐだと、テレビを見てこらつた、横になつてうたた寝をしてしまつていた。

玄関のドアがバタンと閉まつた音でフト覚醒したが、母親が帰ってきたのだからと、そのまままた眠りこいつとした。

母親にしては何かがおかしい、変だ、起きよつゝと思つた瞬間、部屋の中に何かこる、と感じた。

マズイ……、さればマズイ。

その【モノ】は、いままでに感じたことのない重く淀んだ空気を漂わせていた。

怖くて目を開けられない。全身に鳥肌が立つ。

その【モノ】はもうへつて近付いてくるようだ。

びつこよひじつよつ……。

サキに教えてもらつたおまじないを心の中で唱え続けた。決してひとに話してはいけないと、むやみに唱えてもいけないことがわかれているおまじないだ。

一瞬、その【モノ】の気配は薄まつたが、

それは一瞬の事で、むしろ先ほどより気配は強まり、さらに近寄ってくる。

おはあちやん助けて……！

その【モノ】は、すぐそこにある。

シツと「」たふの様子を窺つてしるよへた。覆いかぶさつて来そうになつたところで、

意を決して鼻を起こし、そ

ドアを開けると、何かが脇をショツツと通り過ぎた。

おばあちゃんの所へ、早く

玄関へ向かおうとしたA子の行く手には、廊下の幅一杯に……。

それは、今までに見たり感じた事のある【悪いモノ】の比ではなかつた。

暗い空気がほんやり霞んでいる、などではなく、クッキリと、しつかりとした形を持つていた。

それは……。

いや、
言い表す事のできない、

しかも、とんでもないだけの「負」のエネルギー。

危険だ……！

早く、早く逃げなくては……！

△子は踵を返すと、もう一度居間へ戻った。
居間の隣の仏壇のある部屋へ寄り、数珠を引っ掻む。
そして部屋を走り抜ける、裏口へと。

裏口のドアが見えたところで、
裏口のドアが開いた。

そして、その向こうから、手だけが現れると、
ゆっくりと手招きをし始めた。

家から出れない気だ……。

後ろから、

あの【モノ】が追つてくる気配がある。
ゆっくりだがジリジリと近付いてきてる。

アレに捕まるのはヤバイ……。

△子は数珠をしっかりと握りなおすと、
あのおまじないを声に出して唱えながら、
手の方へ向かつて走った。

手の脇を通り過ぎる時、
今までゆっくりとした動きをしていた手が急に、
ぐわっと指を広げ、
△子へ掴みかかってきた。

身をよじつ、なんとか捕まりず^{ヒテ}外へ出、
裸足のままサキの家へ走った。

走りながら振り返ると、手だけが凄い勢いで追つてくる。

おばあちゃんおばあちゃんおばあちゃん……！

サキの家が見えた。

と、同時に、サキが外へ出てきた。
不審げに顔を曇らせながら。

「おばあちゃん…………ん…………！」

サキは△子を背後へ庇つた。

手はすべりこへ迫つている。

ツツとサキが一步踏み出した。

すると、手はビクン^シとし、その場で急停止した。

そして、その場で苦しげにもがいでいる。まるで何かに掴まれているかのよう^{ヒテ}。

その手は、サキが何事か咳くと、徐々に動きが静かになり、
空氣の^{ヒテ}中へと消えていった。

「アブなかつたねえ～

サキは△子を振り返り、二^{ヒテ}とすると、のびのびとした調子でやう言つた。

「へ、うひまだもうこい、ヤバイのが…………！」

「うん、らしいねえ～

「……、って大丈夫なの？！　ほつとこて？！

「…………！」

「うん、あつちはムックに任せて大丈夫だよ」「え、ムック？！ほ、ほんと？！」

「ウン。あ、もう大丈夫みたいだよ」

「そ、そんなの分かるの？」

「ウン。わ、ちょっと上がつておいき。足もホラ、きれいにしてかないと」

玄関先で足を拭き、
家へ上がり、居間のソファへ座つて落ち着いたところで、
恐怖感がガーンーーーッと蘇つた。
いまごろ涙がこみ上げてくる。

「はい、お茶」

「うん、ありがと……。……、おばあちゃん、あれは何だったの……？」

「ん~。なんだろうねえー」

「まかさないで教えてよ……」

「そのうち分かるよ。わー、そろそろA子にも教えておかないとねー」

「……なにを……？」

「祓いかた」

その日以来サキに少しづつ教えられ、

A子はちょっとしたモノなら祓えるようになつたし、自分の身は自分で守れるようになつた。

大人になつてからは、

見えたり感じたりする機会はぐつと減つたが、

それは自分でコントロールできるようになつたからなのかもしけない。

見えなければ、感じなければどんなに幸せだらう。

幾度となくそう考えた。

「氣」が滞りやすい場所へ行くと必ず【何か】がくつついでしまつたが、そのぐらいなら丁重にお帰り願うことはできるようになつた。

自らいういう能力のことほとんに話せないのだが、どうこつわけか、時々、その手の相談を受けるようになつた。

好きでこんなことができるわけじゃない。

初めは断るのだが、それでも結局、やはり氣の毒になつて、話を聞けてしまつのだつた。

B子から持ちかけられたその話も、初めはいつもと同じだつた。

「A子さん、相談があるんだけど……」
「うん、なに?」
「実は……、うちに何かいるみたいなの……」
「……、何か、って?」
「えつと……、誰もいない部屋で物音がしたり……、声がしたり……。ちょっと来てみてくれないかな……?」
「……、わたし、そんなに能力ないから……」
「おねがい……! とりあえず来てみてくれるだけでいいから……! ねつ?」
「……うん……わかつた……」

B子の運転でB子の家へ向かう道すがら、

A子はやわらかと鳥肌が立ち、胸騒ぎがするのを感じた。

行きたくない……。

その思いは、家に近づくにつれ、段々強くなってきた。
冷や汗が背中を伝う。

「もうすぐよ。その角を曲がった」

曲がった瞬間、

A子はビクンとした。

あれだ……。あの家だ。

家が整然と立ち並ぶ中、どれかと言われなくとも分かった。

車を降り、家の前に立つ。

いやだ……。入りたくない……。

あの小3の時の恐怖が蘇った。

「れは……。ヤバイ。

「せへ、じへぞ」

B子が玄関のドアを開けた瞬間、
ドアと中から風が、といつか、

圧力が弾けた。

「フツーのひと」には感じられない感覚だ。

居間、仏間、台所、トイレ、風呂、そして2階と見て回る。
ざわざわと悪寒が走る。

ガンガンと頭痛がする。

2階に3部屋あるうちのひとつに入った瞬間、

「…………」

窓際のソファに誰かががうずくまっているのが見えた。
深く頭を垂れて腰掛けている。

【それ】がそろそろと頭を上げる。

見てはいけない…………！

足が動かない。

目も逸らせない。

冷や汗がこめかみを伝つ。

ガンガンガンガン……キーキーキーキー……ガーガー……キャーキ
ヤー……ぐわんぐわん……

耳元でうるさく雜音が鳴つている。

【それ】の顔がだんだん上がつてくる。

【それ】の顔が見え……。

顔を見てはダメだ……！

必死で念じる。

呪縛が解けた。

すぐに田を逸らす。

「A子さん、大丈夫?！」

「下へおりましょう……」

「顔が真っ青よ……！ 大丈夫……？！」

「ええ……。とにかく外へ出ましょう……」

「おうちまでお送りするわね」

「ええ、助かるわ、ありがとう……」

外へ出、車に乗り込むとして、ゾクッ……とした。首筋に視線を感じる。痛いほど。

恐る恐る家を振り返り、視線を巡らすと、2階の、先ほどの部屋と思しき窓から、人影がじいっとこちらを見下ろしている。

黒い影だけで、顔は見えない。

身体を貫くように、また悪寒が走る。

A子はやつとの思いで視線を断ち切ると、車に乗り込んだ。

車に乗り込むと、ぐつたりとシートに沈み、目を瞑る。

心の中でもじないを唱え、拾ってきた小さなモノを祓う。

家から遠ざかるにつれ、

だいぶ気分が良くなつてきた。

「A子さん、具合はどう?……？」

「ええ、もうだいぶ良くなつたわ……」

「……、やっぱり、あの家……、何かいるのね……？」

「……ええ……。それもかなりのが……。わたしがどうとかできる次元のモノじゃないわ。

「すぐに引っ越しをさなきやダメ」

「もうなの……。わかったわ、主人と話してみる」

「うん、すぐに、早くね」

「わかった……。まあ、A子さんのおひげに着いたわ。今日は『』めんね、ありがと」

「送ってくれてありがとう」

A子は、そのまま家へ入らず、

真っ直ぐサキの家へ向かった。

A子が玄関の前に立つと、ドアが開き、サキが立っていた。

「なんかひどいのに会つて来たねえ」

「うん……」

「あればダメだよ。どうにもできない。関わっちゃダメだよ」

「うん……。わかつてゐ……」

「や、とつあえず上がつて」

A子は、家に上ると、居間のソファにぐつたりと身体を横たえた。

「ほら、これ飲んで」

A子は身を起した。

「なに? お湯?」

「飲んで」覧

「……しょつぱッ……」

「うん、お湯に塩を溶かしたものさ。体の中からも清めないとね」

「そりなんだ……」

「ま、これ持つて行きなれ。」

サキはエプロンのポケットから何かを取り出しつつ、A子へ手渡した。

「…………？」

「うん、う。お守りだよ。なるべく身につけて、眠る時は握つて眠りなさい。」

「うん、わかった。ありがと。」

「あの家へはもう行つてはダメだよ。」

「うん……。でも、B子さんはどうなるの？」

「どうにもできなによ、あそこへ行かせ」

「せつか……。」

「絶対行つちやダメだからね。」

「うん。」

「や、早く帰つてね。」

「うん。ありがと。」

A子は、サキの家を出ると、

家へ帰り、風呂へ入り、食事もしないまま布団へ入った。

「こし……。石を握つて眠らないとね……。」

フト『氣づくとA子はあのドアの前に立つていていた。

開けてはいけない……！

その意志とは裏腹に、A子はノブに手をかけてしまつた。そして、ドアを開くとやせり、窓際のソファには誰かがうすくまつている。

あの時と同じ……。

そして、【それ】は、ゆっくりと顔を上げる……。

顔を見てはいけない……！

そつは思ひのだが、
やはりあの時と同じ……、
体はまったく動かず、視線すら動かせないのだった。

そうしてこらつても、【それ】は徐々に顔を上げ……。

顔が見えてしまひ……！

「こやあああああ——！——！——！——！——！

叫んで目が覚めた。

A子は自分のベッドに寝ていたのだった。

「ゆめ……」

手にはしっかりと口を握りしめていた。

それ以来、

A子は毎晩その夢を見るようになった。

眠るのが怖い……。

反面、

あれは誰なのだろう、とう思には常にあった。
見てはいけない、でも見たい、と。

B子はとこうと、

サキの口添えもあり、早々と引っ越しした。

引っ越ししてしばらくしてから来た電話でB子は、
「やつぱり家のせいだったのね……。

実は、主人との仲もうまくいってなかつたんだけど……、引っ越し
してからはなぜか、なんでそんなに二人とも神経質になつていたん
だろうねー、つてお互いに話して。

体の調子も良くなくて、気が晴れる日はなかつたんだけど、いま
は毎日が楽しいわ！

本当にありがとう！

サキさんにもよろしく伝えてねー！」

と。

にも関わらず、A子の毎晩の悪夢は終わらないのだった。

サキはそんなA子の気持ちを見透かしたように、
A子の顔を見るたび、

「あの家へは行つていけないよ」と言い、
「なぜ？」と聞いても、

「行つてはいけないよ、絶対に」としか答えないのだった。

あれは誰なのか……。

こんなにもひとに害を『え、
自分を苛むあれは誰なのか。
何者なのか。

つこに、A子は、

もう無人となつたその家の前まで行つてみた。
来てしまつた、と言うほつが正しいのかかもしれない。
気づいたらその家の前にいた。

どうせ入れるわけがないんだし。

と思つた瞬間、

バタン!!

玄関のドアが開いた。

入つてはいけない。

それでもやはり、

その気持ちとは無関係に体が勝手に家中へ入つていいくのだった。
何かに導かれるように、あのドアの前へ。

夢で何度も見たあのドア。

あれ以来毎晩見たあの見慣れたドア。

開けてはいけない。

いつも通り、

その思いを差し置いて、
手はノブへかかり、

ドアを開けるのだった。

そして、やはり、窓際のソファには誰かが。

【それ】がゆつくりと顔を上げる。

見てはいけない……。

でも……。今日は見るんだ……！ そのためにあたしは今日来たんだ……！

【それ】の顔が見え……そう……。

いつもならここで自分が覚めるが、
今日は夢ではない。

しつかりと、気を確かに。 何を見ても動搖しないよ！」

自分に言い聞かせ、

【それ】を注視する。

【それ】の顔が上がりきった。

窓を背にしているので、
逆光になつてよく見えない。

口許が見えた。

歯が見える。

口を開けているのだ。

いや、笑っているのだ。

ニヤニヤと。

視線を上へずらす。

え……。

これは……。

「こやあああああ————————」

A子は崩れるのみでその場に倒れた……。

……、つとこつ話。

え？ で？ それで、【それ】は何だったの？ 誰？

A子さんはそれからどうなったの？

A子さんはそれでちよつと戻が変になってしまったらしいよ。

で、【それ】は？

【それ】はね……。

当のA子さんがそういう状態だから……、きちんととした話は聞けなかつたみたいだけど……、その後のA子さんの言動から察するに……、

察するに……？

【それ】は「A子さんはそのひと」だつたのではないか、と……。

……。

あーあ、聞こいやつたおこの話。ヤバイよ。——。

ハッ……？！ ヤバイって何が……？！

……夢みるよ……。

……、つてなんの……？！

だから、A子さんが毎晩見た、つていうあの夢。

ええええええつ！－ いやだよ、そんなの！

だから最初に言つたじやん、聞くとヤバイよ、つて。それで

もいいつて言つたじやん。

だつて……。

泣くなよ……。

まあ、俺は少なくとも大丈夫だから。

え、なんで？！

石を握つて眠つてるから。

……、つていまも……？！

ああ、もあらんや。

この話、聞いたのいつ？

……三年前。

つというわけでわたしも、
飼っていた犬の形見の石を握つて眠つてゐるのでした……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2639g/>

見るな

2010年12月30日02時47分発行